な考え方は1930年の河上肇の論文「共産主義社会への展望」で暗示されています。

三　今後の課題

人道主義者からマルクス主義者へと形容される河上肇の思想的遍歴は、道徳的権威を備えた「士」の主導する社会改革・革命という1点で一貫しています。毛沢東は河上肇の著作からこの一貫性を読み取っていたのではないでしょうか。1962年訪中した宮川実に対し、毛沢東は河上肇の変革の精神を称え、革命家にして憂国の学者であると評価し、その精神が『貧乏物語』以来一貫しており、河上肇のよい著作は中国語に翻訳して読ませねばならぬと語ったといいます。毛沢東は実際1941年に延安で河上肇の『経済学大綱』序文の中国語訳をプリントして幹部用教材として配付しています。

最後にまとめにはいりたいと思います。河上肇が志向したのは「道徳と経済の調和」ないし「道徳を支えるための経済」であり、河上肇が追求したことを柔らかな言葉で言いなおせば、人間が人間らしく生きるためには、経済社会がいかにあるべきかという問題であったと思います。1930年代の河上肇にとっては、世界戦争の危機をいかに回避するかということも大きな課題でした。ただ、結果的に河上肇のたどり着いた思想は、人間の道徳的向上を目指す理想主義的側面をもつ一方、プロレタリアート独裁に代表されるような権威主義的体制を是認するものでもあり、権威者としての人間の脆さを看過し、社会運営に「民」が主体的に参与する重要性をほとんど考慮していないようなものでした。これは社会科学がいかなる思想に支えられるべきかという問題を、現代にまで投げかけていると思われます。

これで私のつたない報告を終わりにさせていただきます。ご叱正のほどよろしくお願いいたします。

八木：ありがとうございました。

（拍手）

八木：すぐにご意見を述べられたい方もおられると思いますけれど、もう少しお待ちいただいて、次に張先生のお話をいただくことにします。最初のセッションのおわりで、お2人の報告について簡単なご意見等があれば、それを受けたいと思います。それでは張先生、お願いします。

張：ご来場の皆様、本日の会議に出席できて非常に光栄に存じております。特に大西教授の招聘とご来場の皆様に感謝を申し上げます。私は中国の厦門大学で哲学の研究をしておる者ですけどれも、主にマルクス主義哲学および中国の近代、現代の問題との関わりにつ

いて研究をしているわけです。本日この場をお借りしまして、故厦門大学の校長である王亜南氏の経済・哲学思想を皆さんにご紹介したいと思います。

どの分野においても数少ないトップの人物がおります。彼らは自分たちの専門分野の大家だけではなくて、視野も境界も職業の限界を超えて、学科と専門分野の局限を超えて、学科を超えた大学者でもあるわけです。王亜南氏は有名な経済学者だけではなくて、優秀な政治学者でもあり教育者でもあり、さらに社会活動家でもあるわけです。やはり彼が哲学の分野において高い素養と理解力があるからであります。王亜南氏は経済学と哲学の共通性についてこう述べております。２つのものは同じく特定の社会歴史段階の物質基礎の反映である。特定歴史的段階の社会意識であると。この２つの相違は反映した社会基礎距離の違いにあると主張しているわけです。王亜南氏はこの距離の遠さによって、哲学を最上級の意識形態であると称しているのです。なぜなら哲学は物質基礎から最も離れていて、社会物質の束縛から一番弱いという立場にあるからであると主張しています。そのかわりに経済学は最低級の意識形態と考えております。それはやはり物質基礎から最も近くに存在し、社会物質の束縛が一番強いからと考えているのです。

王亜南氏の見解はエンゲルスの考え方とよく似ている。エンゲルスは「さらにたかい、すなわちいっそう物質的·経済的基礎から遠ざかっているいろいろのイデオロギ-が、哲学や宗教のかたちをとってくる。」と言っております。その中でエンゲルスが言っていた「最も高い、最も遠い」というものは、王亜南氏の言っている高級・低級というものは、皆意識形態が物質基礎から離れた距離を指しているわけです。王亜南氏はこの距離の遠さで、経済学および哲学はそれ自身が受けている、そしてそれ自身が反映している経済基礎の束縛力の強さも違うと主張しています。彼は18世紀のイギリス、フランス、ドイツの事例を上げていたのです-けれども、この３つの国の中では経済の発展の程度からいえば、まずイギリスが先にあるわけです。それからフランス、ドイツの順番になっているのですが、しかし学科の発展からいえば、経済学はイギリスにおいて最も先進的である。社会学はフランスで最も先進的である。哲学はドイツが最も先進である。経済が比較的遅れているドイツは、イギリスおよびフランスのこの思想の精粋の部分を受け入れて自分の哲学を比較的高級な形態に発展させることができた。これは哲学が社会物質基礎に対して非常に伸縮性が強い。その代わりに経済学は非常に弱いということを証明できたと思います。

経済学は社会物質基礎に対してその反映が非常に直接であり、一方哲学の場合はその反応は非常に間接的であると言っています。哲学の中で観念と自分の物質存在条件との間にはその関係があるのですが、その関係はますます複雑になっているわけです。ますます中間的な部分が見えにくくなってきているわけです。その関連性というものは簡単に見つけ出すことができなくなっています。この中間部分の作用には２つの方向性があるのですけれども、まず哲学が経済基礎を反映するところは若干中間部分を通すのですが、また哲学が経済基礎に対して反対の作用もするのですが、これも若干中間部分を通すわけであります。経済学は最も重要な中間部分の１つであるということです。

王亜南氏はこの２つとも社会物質基礎の反映であるから、２つとも実践の学でありかつ歴史的な学でもあると考えています。これを基にして、哲学は人間の全部の知識を完全な世界観の上で統一した。経済学の特殊な法則は抽象され、受け入れられて、この総法則の中に含まれている。哲学の法則は経済学の方法論になり、経済学の法則はこの総法則の特殊な側面の１つになり具体化されている。王亜南氏はこれについて、２つとも実践的な学問であると同時に、歴史的な学であるから私たち哲学を研究している学者であれ、経済学を研究している学者であれ、哲学と経済学の現段階に果たしている中国の実践的かつ歴史的な任務を忘れてはいけないと強調しました。

王亜南氏が「中国経済学」を創立するにあたって行った提案と理論的実践は、この思想を表す模範である。経済学の実践性と歴史性から、王亜南氏は深く中国の現実の土壌の中に根を張り、特に中国人が読むのに適している、中国人が興味を持っている、特に中国の社会経済を改造でき、中国思想の束縛から解除できる性質と内容を持っている政治経済学を提唱したわけであります。王亜南氏が編集した「中国経済原論」という本は、これは中国の半封建半植民地的な社会生産関係のもとにおいての経済傾向に対して、全面的な調査と研究を行ったものである。学界ではこの本につきましては中国式の資本論と称されている。さらに、彼の「中国官僚政治研究」という著書ですけれども、これも中国の特色がある政治実践および政治哲学を直視したから、同じく中国の社会科学実践性と歴史性を反映する力作であります。

経済学と哲学との関連性は２つの歴史発展の中で見いだすことができます。まず経済学は哲学から分離しているものである。また経済学というのは哲学の影響下において形成されたものでもあります。

王亜南氏はまず、経済学は哲学の領域の中に混ぜ込まれて研究されたものであると提起しています。近代工業と資本主義の勃興にしたがいまして、経済生活がますます複雑化した。大量の実際問題と理論問題が発生したわけです。社会の中の経済現象の因果法則を追求する科学研究が発展し蓄積されるにつれて、経済学は徐々に芽生え、そして形成、成長という過程を通して、最後には独立できる条件を満たしたのであります。

アインシュタインが言った通り、哲学はすべての科学の母である。子どもは幼い頃母の懐の中で育てられ、大人になった後に分家するわけであります。近代においては科学の発展というものは、絶え間なく具体的な科学が哲学から離れていく過程を経験している。最初に離れていったのは自然科学である。そのあとに離れていったのは社会科学である。王亜南氏は、経済学は社会科学の中で最も基本的な科学であり、最初に哲学から分離していった社会科学でもあると考えております。

次に、経済学が哲学から独立したあとも哲学との関連性は無くなっていないわけです。それは哲学の影響のもとで発展し続けると同時に、また哲学の発展そのものも促進したのであります。

ペティおよびアダム・スミスの研究をすることによって、この二人の経済学説は共に、

市民の哲学が経済思想上の反映であるというのがすぐに分かると思います。

ペティは財産と価値の源泉を研究したわけであります。彼の名言は「労働は財産の父であり、土地は財産の母である」ということです。彼の名作「税論」では、政府或いは公共経費の支出、およびどうすれば合理的かつ有効に利用できるかということが研究の中心ですけれども、マルクスによれば、ペティという人は最も才能のある経済学者の１人であると賞賛したということです。ペティの経済学の基礎は、イギリスの唯物主義哲学者ホッブスの観点と主張からなっております。

王亜南氏によれば、スミスの経済学説は、全てにおいて経済的な個人利己性を研究の出発点としたと述べているのですけれども、スミスは、人間が経済活動に従事する時においてはいつでも個人の利益最大化を目標としている。スミスは、自由競争は個人の利己性を実現できる最高の社会規制である。市場自由主義は最も合理的な社会形式であると考えています。スミスは倫理学者であるハチソンの弟子になったことがあり、彼は哲学者であるヒュームとの間では非常に仲が良いいとうことです。スミスは人間性の研究から経済学を研究した。これはヒュームの人間性は全ての科学の前提であるとの認識から出発したものであります。

マルクスの経済学および哲学は、最も典型的に経済学と哲学がその発展の中で相互促進することを証明した。マルクスは哲学から自分の理論活動を始めたのですけれども、市民社会の解剖を完全にするために、彼は主な戦場を経済学の領域に移したのですけれども、しかし最後まで哲学を放棄したことはなかったです。彼は 19 世紀の 40 年代頃には既に唯物史観の基本的な理論を提出していた。それ以降、長い経済学研究の中でこの歴史観と、彼がドイツの古典哲学から受け入れた養分が形成した唯物弁証法は、終始彼の経済学研究の根本的な方法であったわけです。それと同時に、彼の経済学研究過程と成果も、反対的に彼の哲学成果を豊かに証明し、発展させたわけであります。

現代経済学は高度に分化したものの、哲学から離れたことはありません。それは発展している間において、哲学の価値観と方法論の影響を受けつつ、同時にそれが含まれた哲学の前提、価値観を通して哲学に影響を与えているわけです。

経済学はすでに１つの独立した学科として存在していますけれども、現代では膨大な学科群に発展したわけで、古典経済学、現代経済学、またマルクス経済学はそれぞれ自身の哲学基礎を持っている。理論経済学の根本的な仮説の多くは、まだ哲学的な前提を含んでいます。さまざまな流派の経済学説の間で継続的に発生した理論的な検討は、しばしば認識論と方法論の検討、社会哲学と倫理学との検討に関わっている。現実的には経済実践の主体および経済理論の主体が、その自身の世界観、価値観、方法論を持つなら、王亜南氏の述べた経済学と哲学との関連性が必ず表れ続けると考えています。

経済学と哲学との関連性は、特に集中的に或いは大学者の１人が２つの身分を持っていることに反映されている。すなわち、偉大な経済学者はしばしば高い哲学素養を持ってお

り、偉大な哲学者はしばしば経済の思想家でもあるということに反映されています。

王亜南氏は、近代の偉大な経済学者の中で最も経済学と哲学との関連性を強調したのはジョン・ミルであると言っています。ミルは経済学と社会哲学のほかの部門は分かれなくつながっていると考えています。アダム・スミスの考え方の中でも、経済学と哲学は終始緊密につながっていると考えています。彼は「国富論」だけでなく、哲学倫理学上の名作「道徳情操論」というのも発表したわけです。

マルクスはさらに経済学者と哲学者を一身に集中した最も代表的な人物である。彼は一生に２つの発見をしました。つまり唯物史観と剰余価値学説を発見したことであります。前者は哲学領域に徹底的な革命を引き起こした。後者はマルクス経済学説の基礎を築き上げたわけです。この２つの発見はマルクスを人類の運命に影響を与えた偉大な哲学者と経済学者にさせたわけであります。

王亜南氏自身も非常に良い例であります。彼の中国の半封建半植民地経済に関する理論的な研究は、中国の新民主主義経済と社会主義経済の研究、さらに中国の社会経済史の研究、そして特に彼の資本論の翻訳および翻訳の中に行われたマルクス経済学説と経済学説史の研究に対して重要な貢献を与えたわけであります。彼は 40 冊以上にのぼる著書や訳本、さらに 300 以上の論文を発表した、中国経済学分野においての大家であります。そして、彼の一生の学術活動、彼のたくさんの著書から、我々としては彼の古代哲学、近代哲学に関する研究、およびマルクス哲学に関する研究をみることができます。彼の 20 世紀の 50 年代、60 年代の研究から分かるように、彼は非常に高い哲学素養を持っている学者である。この素養こそが彼を普通の経済学者を越えさせ、現在哲学素養を持つ科学を超える科学者にさせたのであります。

現代でも成功した経済学者はしばしば自分の哲学思想を持っております。例えば、ノーベル経済学賞の受賞者であるサイモン、フリードマン、ブキャナンなどは相当の哲学素養を持っております。ハイエク、さらにアマルティア・センという人は、西洋の哲学界でも非常に有名な学者である。日本でも皆さんのご存じの河上肇氏、見田石介氏などの有名な経済学者も同時に、非常に高い哲学素養を持っているわけです。

一方、哲学者の中にも、同時に経済学者である人も少なくない。古代ギリシアの哲学者プラトンとアリストテレスは、価値論と分業論で経済思想家と見なすことができますけれども、さらに哲学者サイラスは同時に古代の有名な経済政策者でもあるわけです。

経済学は哲学から分離した後も、まだたくさんの哲学者は同時に経済の思想家でもあるわけです。マルクスはいうまでもなく、ドイツのヘーゲル、イギリスのヒューム、ロック、フランスのモンテスキュー、ケネーなどはみんなそうであります。

現代、学科の分化はますます細分化しております。同時に学科間の浸透と交差も発展しているわけです。優秀な経済学者は前と同じように哲学の素養を欠かすことができません。社会哲学者も社会の経済現象を無視することはできない。

なぜ哲学者が経済現象の研究を重視しなければならないかというと、王亜南氏はこう考

えています。経済的な観点から見れば、社会も経済生活も、人間生活の基盤である。だから経済現象は意識形態の中に最も反映しやすく、最も重要な部分であり、それ故に哲学者は避けられない部分でもあるわけです。実践的な観点から見れば、国或いは個人の利害関係は、いつも経済上の利害を主とし、哲学者の避けられない問題であります。

彼の思想には我々に対して今日でも大きな啓示があります。中国は現在、伝統社会から現代社会へと移行しつつある時期にあります。この変化の基礎は経済体制の遷移であります。もし私たちが、哲学が本当に「時代精神の精髄」になるようにしたいのなら、我々は時代の基本的な経済問題を避けるわけにはいかないわけです。経済を研究しないで、どうして社会哲学を研究できるのか。どうして社会発展の理論を理解できるのか。どうして現代化の傾向を理解できるのか。中国の現代化の道筋をどのように探すことができるのか。経済を研究しないと、我々はどのように経済生活の中の大量の倫理問題を理解できるのか。これらの倫理問題は道徳の言い争いの中心と焦点問題であり、政治生活、文化生活の中で倫理問題はそれを基本とし、それと緊密に関係しているわけです。経済のグローバル化の傾向を理解しないと、どうしてグローバル化の状況の下では世界の価値とアジアの価値に関する論争を理解できるのか。どうして中国社会の価値観の変化を理解できるのか。経済の変動が人間の精神において、生活において、どのような影響を与えるのか、ということを理解できるでしょうか、ということです。我々は経済の発展が自然環境に与える影響を研究しないと、どうして生態哲学的な視野及び人類の生存環境に対する反省や堅実的な関心を持つことができるのだろうか。　哲学は一連の媒介を通じて社会基礎を反映しているからであります。もしこの経済現象と経済学という媒介がなければ、哲学、特に社会哲学は空虚にしかならないわけです。哲学がこの空虚から逃れようとするのであれば、いわゆる「象牙の塔」から出て、社会実践、特にこの経済変革の中で養分を吸い取って、自然科学と社会科学の広い分野、特に経済学の中の思想の資源を抽出し、経済学との連携、すべての自然科学と社会科学との連携の中で自分の発展の道を開かなければならないわけです。

ついでですけれども、王亜南氏は1920年代と1930年代、２度にわたって来日したことがあります。東京に住んでいました。彼は日本でマルクスの資本論および経済学を勉強したわけですが、しかも日本のマルクス主義者の影響を強く受けています。

河上肇先生は中国の早期のマルクス主義者および信奉的な青年に強い影響を与えていました。当時この厦門市内の本屋においては河上肇先生の本を売っていました。さらに現在、この厦門大学では一部の教授、つまり年をとった教授たちは当時、学生であった時には河上先生の著書を読んだことがあります。現在、厦門大学の図書館においても河上肇文集も所蔵しております。

長時間、ご静聴いただきましてありがとうございました。

（拍手）

八木：ありがとうございました。三田先生と張先生のお話を伺いました。今この段階で、休憩に入る前に両先生にお尋ねしたいことがありましたらどうぞ、壇上の方もフロアの方も手を上げてください。いかがですか？

私自身も、今張先生のお話を聞きますと、意識形態に幾つかのレベルがあり、経済的な意識形態は下のレベルで現実に近いんだということの議論、これは河上肇の「いわゆる意識形態について」という論文を思い出します。また王亜南先生が「中国経済学」というふうに言われたのも、これも京都では戦前期に「日本経済学」ということがいわれたので、おもしろいと思います。私も中国に行った時に、中国経済学というのがこれから生まれるんだという話を聞きました。こういうことも後で議論をしてみたいと思います。よろしいですか、みなさん…あるいは壇上の方……。それではただいまより 10 分間休憩とします。

（休憩）

八木：では本学の３教授にご意見をいただきます。初めに大西教授、次に山本教授、そして最後に本山教授の順にご発言いただいて、その後討論ということにいたします。それでは大西教授、よろしくお願いします。

大西：経済学部の大西です。お手元のレジュメ集の中に「現代中国のマルクス経済学と河上肇」という私の１枚ものの簡単なレジュメがございます。ⅠとⅡと順番でやろうと思ったのですが、話の流れで逆にします。というのは、先ほど河上肇の影響というものを三田さんからお話いただきまして、それから張小金さんから王亜南の話がありました。そこの構造をまず私のほうから、おさらい風に話します。そのためにまず、レジュメ集の中の「当代中国著名マルクス経済学者簡譜」を見てください。これは私が作ったもので、現在中国でマルクス経済学の影響力を大変強くもっている研究機関というのが何種類かございます。もちろん程度によるわけですが、その中でとりわけ有名なものに、中国人民大学、復旦大学、そして南開大学、厦門大学、そして「付録」として書いた中国社会科学院という研究機関があります。その中で、中国人民大学のところを見ていただければと思うのですが、宋濤先生というお名前が冒頭にありまして、その括弧の中に、河上の弟子で中央党校の設立者となった王学文の弟子となっております。つまり、王学文さんという方が河上の弟子であります。そして、その弟子が宋濤さんということであります。

今４つの大学を並べ、さらに社会科学院を述べましたけれども、この中国人民大学は、実はその中でもとりわけ特別に中国マルクス経済学で高い地位を有しております。中国のマルクス経済学の主要な学会に「中国資本論研究会」というのがございまして、私も最近はだいたい常連で参加させていただいていますが、そこは中国人民大学を中心に動いております。前会長、現会長、副会長という者をずっと人民大学から出しておりまして、特別